

2千万人の「遠い」隣人

# 李台湾総統はなぜ来日できないのか

## 「民意の代表」を拒む日本政府の「良識」とは

台湾の運輸大臣にあたる劉兆玄（リウチョウエン）交通部長が六月十六日に来日し、名古屋空港で起きた中華航空機事故をめぐる、国会内で二見伸明運輸大臣と会見した。

日中国交正常化にともない、日本と台湾は一九七二年九月に外交関係を断った。それ以来、台湾の閣僚が日本の現職閣僚に公式の席で会談したのは初めてのことだ。しかし、台湾の有力紙「中国時報」はこの歴史的な出来事より、

同じ日に与党国民党の大幹部、蔣彦士総統府秘書長が新生党代表幹事である小沢一郎氏と会見し、訪台を要請したことを大きく扱った。

小沢一郎氏に期待かける

九二年八月、小沢氏は来日中の黄石城・行政院政務委員と会った後の記者会見で、閣僚の台湾訪問を認めるべきだとの見解を示した。

また、李総統の訪日の可能性についても、「その立場の方がおいでになれば歓迎するのは当然」と、訪日に問題はないとした。

中国のパワーにより外交空間を締められている台湾にとって、重大な外交目標の李総統訪日問題にはつきりものをいう小沢氏は、日本でも最も頼りになる「最高権力人土」だろう。念願の日台閣僚会談が実現した



6月15日、名古屋で行われた中華航空機事故の追悼献花式。様々なレベルで日台間交渉が必要だ

ことよりも、小沢氏の動向が関心を集めるのである。それほど台湾側の総統訪日への意欲は強い。「京都大学の同窓生と旧交を温めたい」

李総統自身が、台湾を訪れた金丸信元副総理に訪日の希望を明らかにしたのは、九一年六月のことだった。

日本統治下の台湾で生まれ、京都大学で農学を学んだ李総統は自らを、「二十二歳までは日本人だった」という。

今年七十一歳になる人物の訪日の希望はごく自然なものといえる。しかし、ただのお年寄りではなく、経済力をバネに外交関係のない諸国との関係強化を図る台湾のトップであることが訪日を困難なものにしている。

日本は「笑いもの」になる？  
台湾の閣僚の公式訪日など政府レベルの交流は、「台湾は中国の一部」とする中国からみれば「二つの中国」を助長するものだ。日本政府も台湾との接触は非政府間に限定するという方針を守ってきた。李総統の訪日は、「想定していない」（外務省）話となるのである。

だが、台湾外交部（外務省）首脳は、総統訪日実現に向け、「時期は決まっていないが、あらゆる可能性を考えて、着々と手を打っている」と語っている。先の運輸相会談や、小沢氏の側近といわれる熊谷弘官房長官に六月二日、台湾立法院の議員団が会ったりしたのも、その露払いである。百四十二億という対日貿易赤字解決のために、通産大臣との会談も視野に入れている。

しかし、中国の李鵬首相が今年三月、細川護国首相（当時）に日台交流に対する警戒心を示したように、小沢氏の「怪力」をして、李総統訪日実現は依然として困難な情勢だ。この見方について、この外交部首脳は、「経済力を備え、総統を問もなく住民の直接選挙で選ぶまでに民主化の進む台湾の中華民国をいつまでも無視していると、大陸との関係のようにアメリカに先を越され、笑いものになりますよ」

李総統自身は作家の司馬遼太郎氏との対談のなかで、「世界がアッと驚く国にも行きます。日本とアメリカは最後に残すけどね」と話している。この発言は、愛してやまないが、優柔不断な日本への思いやりなのか、それとも、ほやほやしている米國を先に訪問するよというシグナルなのか。

外務部 藤原秀人